

## 創世記39－40章 「闇にいてもおられる主」

### 1A エジプト人の奴隷 39

#### 1B 侍従長の家の管理 1－18

##### 1C 主の祝福 1－6

##### 2C 妻の言い寄り 7－18

##### 1D 神への畏れ 7－10

##### 2D 迫害 11－18

#### 2B 監獄の管理 19－23

### 2A 監獄の忘却 40

#### 1B 同じ監獄 1－4

#### 2B 夢の解き明かし 5－19

##### 1C 神のなさること 5－8

##### 2C 献酌官 9－15

##### 3C 料理官 16－19

#### 3B 献酌官の復帰 20－23

## 本文

創世記 39 章を開いてください。私たちは、前回、37 章でヨセフが、兄によって、エジプトに向かうイシュマエル人の隊商に売られたところを見ました。その続きが 39 章です。ヨセフは、17 歳という少年です。兄から裏切られ、遠くのエジプトに奴隷として売られます。これだけでも、恐ろしいことですが、さらに彼は、監獄の中に入れられます。彼にとって、暗黒の人生と言ってよいでしょう。しかし、そこに主がおられました。私たちの主は光であられ、闇の中に光というものは輝きますね。暗闇の中にもおられる主を、ヨセフの生涯から学んでいきたいと思います。

### 1A エジプト人の奴隷 39

#### 1B 侍従長の家の管理 1－18

##### 1C 主の祝福 1－6

<sup>1</sup> 一方、ヨセフはエジプトへ連れて行かれた。ファラオの廷臣で侍従長のポティファルという一人のエジプト人が、ヨセフを連れ下ったイシュマエル人の手からヨセフを買い取った。

「一方」という言葉から始まりますが、38 章では、ユダの生涯が書かれていました。ヨセフを奴隷に売ってから、彼は、兄弟たちから離れました。そしてカナン人の妻を得て、息子たちを生んできますが、主の怒りを買って、殺されます。三男は、長男の妻タマルに嫁として与えませんでした。それで、タマルは娼婦の格好をして、ユダは知らずに彼女を買春します。けれども、彼女に息子を与

えなかったことによるものだと知りました。それで生まれた双子の一人がペレツです。ペレツが、後にダビデへとつながり、それでイエスがお生まれになるのです。

そのことに対して、ヨセフは、これから見ていくと分かりますが、神を恐れる人でした。同じように、異教徒の中に囲まれていましたが、ユダはそれをある意味、望んでいきましたが、ヨセフは、不本意にここに連れて来られています。でも異教徒に囲まれていることについては同じです。ユダは、主ご自身を忘れてはいませんでした、それでもカナン人の慣わしに影響を受けていました。ヨセフは、異教徒に取り囲まれ、その中に生きていましたが、決して自分の神を忘れないだけでなく、神を恐れ敬って生きていました。

同じように、世の中に入って行っても、それが妥協からなのか、それとも遣わされているからなのか？同じところにいても、大きな違いですね。ヨセフは、自分は意図していませんが、神が遣わされて、異教のエジプトにいます。

それで、彼が売られたところは、「**ファラオの廷臣で侍従長のポティファル**」ということです。廷臣というのは、いわゆる大臣とか側近のことです。侍従長というのは、良くない訳だと思います。それは、日本語では宮内庁に勤めている役人のことを意味しますが、そういった意味ではありません。共同訳には、「親衛隊長」と訳されています。そう、ファラオのそばで警護する長ということです。だから、ヨセフも、ファラオに仕えている者たちも同じ、ポティファルの監獄に入れられますが、ファラオに関する警備を担当しているからです。

そして、これが神のご計画の第一歩です。ヨセフがファラオに近づき、ファラオの次の権力者になり、それでヤコブの家を飢饉から救うのに用いられます。パウロも、王たちにも福音を伝える器として選ばれましたが、囚人となってローマに連れていかれ、それで囚人として皇帝の前に出て行ったのです。そこで聖書には記録されていませんが、福音を宣べ伝えなかったわけがありません。

<sup>2</sup> **主がヨセフとともにおられたので、彼は成功する者となり、そのエジプト人の主人の家に住んだ。**

主は、ヨセフが奴隷から解放されるということはありませんでした。ヨセフは、奴隷のままでした。しかし、その中で共におられたのです。そして奴隷の身分として、そこで成功する者とされました。私たちが召されるところは、自由ではない、不足することはあるかと思います。しかし、その制約の中で、主は共におられ、成功させてくださいます。大事なことは忠実であることです。

<sup>3</sup> **彼の主人は、主が彼とともにおられ、主が彼のすることすべてを彼に成功させてくださるのを見た。**

異教徒であるポティファルが、イスラエルの神、ヤハウェなる主を認めています。もちろん、これ

は信じだということではありません。けれども、目に見える形で、ヨセフの信じている神、ヤハウェがおられることを認めることができたということです。

数年前、沖縄戦で、武器を持たずに衛生兵として活躍したデズモンド・ドスという人がいました。映画「ハクソー・リッジ」の主人公です。彼は、信仰心から武器を決して持ちませんでした。それで、部隊の人間から相当、いじめられました。しかし、その戦場で、地獄のような激戦の中で、武器を持たずに、なんと75人の負傷兵を救うのです。次の戦闘に行く時に、彼は、デズモンドに言いました。「私自身は、神を信じていないが、お前が信じている神を信じる。」こう言ったのです。これは本物です。自分自身は、まだ信仰に至っていませんが、しかし、奇跡を目の当たりにした上官が、彼がデズモンドを虐めたことを後悔し、謝罪し、そして、彼には神がおられることを認めました。こういったことが、ポティファルにも起こっていたのです。

<sup>4</sup> それでヨセフは主人の好意を得て、彼のそば近くで仕えることになった。主人は彼にその家を管理させ、自分の全財産を彼に委ねた。

主が働いておられます。第一に、主人に好意を下さいました。第二に、彼の近くに仕えることになりました。そして、第三に、家の管理を任せられ、第四に、なんと全財産を委ねたのです。

<sup>5</sup> 主人が彼にその家と全財産を管理させたときから、主はヨセフのゆえに、このエジプト人の家を祝福された。それで、主の祝福が、家や野にある全財産の上にあった。

主人が彼にすべてを任せたので、主がポティファルの家を祝福されました。家だけでなく、ポティファル所有の野にも祝福がありました。まさに、アブラハムへの約束です。「あなたを祝福する者は、祝福される」という約束です。

ヨセフの生涯も、族長たちの生涯との系列で見ていきましょう。アブラハムには、信仰に生きることを見ました。イサクは、約束にしっかりと留まることについて見ました。ヤコブは、仕えることについて見ました。そしてヨセフは、忠実に生きて、主から多くを任される生涯です。苦しみの中でも忠実に生き、主が栄光へと導かれます。キリストが苦しみを経て、栄光に至ったのと同じです。

<sup>6</sup> 主人はヨセフの手に全財産を任せ、自分が食べる食物のこと以外は、何も気を使わなかった。しかもヨセフは体格も良く、顔だちも美しかった。

食べることは、自分が気にしているのは理由が二つあります。エジプトは、外国人と食事を共にしません。エジプト人たちの間で食べます。そして、食べるものに毒が入っていてはいけけないので、それは自分の責任です。けれども、他は完全に信頼していて任せていて、気を使いませんでした。

そして、次の話に続くものとして、ヨセフが体格が良く、顔立ちも良かったことを述べています。

## 2C 妻の言い寄り 7-18

### 1D 神への畏れ 7-10

<sup>7</sup>これらのことの後、主人の妻はヨセフに目をつけて、「一緒に寝ましょう」と言った。

私たちは信仰者として、必ず知らないといけないことがあります。それは、霊の戦いがあることです。主が働かれれば、世を支配する悪魔は必ず反対しに来ます。ここでは、ヨセフが体格が良く、顔立ちも良かったということを利用して、ポティファルの妻が言い寄っているということを通して、現れています。主が働かれる時に、問題がなくなるのではなく、問題がかえって起こります。霊の戦いがあるのだということを忘れてはいけません。

<sup>8</sup>しかし彼は拒んで、主人の妻に言った。「ご覧ください。ご主人は、家の中のことは何でも私に任せ、心配せずに全財産を私に委ねられました。<sup>9</sup> ご主人は、この家の中で私より大きな権威をふるおうとはせず、私がするどんなことも妨げておられません。ただし、あなたのことは別です。あなたがご主人の奥様だからです。どうして、そのような大きな悪事をして、神に対して罪を犯すことができるでしょうか。」

このヨセフのセリフは、まるでエデンの園におけるようなものです。主は、アダムに、園のある木の実を、何でも食べてよいが、中央の善悪の知識の木だけは、食べたらいけないと言われましたね。ここも似ています。主人は、ヨセフにすべて任せています。何でもすることができるようになっています。けれども、ご主人の奥様だけは別です、ということです。そこだけは絶対に立ち入ってはいけないところであり、それは悪事であり、神に対する罪なのです。

ダビデも似ていました。彼は、御霊によって、戦うところ、どこでも勝利しました。そして、自分のいのちを狙うサウルにさえ、主が有利な状況を造られました。ところが、彼はサウルの命には触れなかったのです。油注がれている方に触れてはいけないとしました。ダビデには、主ご自身が裁かれるのであって、自分の手で下してはいけないと恐れていました。

このように、触れてはいけないものを知っている者は幸いです。これだけは、主のものであるから、そこに立ちいってはいけないと知っている者ですね。日本人たちは減点方式で生きていて、主との関係も、「これこれをしたら、何か叱られるかもしれない。」というふうに考えています。主との関係は、基本、すべてが自由なのです。何をしてもよいのです。主を喜びとしているならば、目の前にある選択肢を自由に選んでよいのです。けれども、触れてはいけないものがあります。それを恐れ尊ぶのです。

<sup>10</sup> 彼女は毎日ヨセフに言い寄ったが、彼は聞き入れず、彼女のそばに寝ることも、一緒にいることもしなかった。

誘惑というのは、一度ではないですね。執拗なのが特徴です。それで、ヨセフは防御線をしっかり、張りました。自分の寝る所は、彼女の寝る所から離しました。また、一緒にいることさえしませんでした。

霊の戦いを知っていることは幸いです。時には極端に見えるようなことも、する知恵が与えられます。例えば、伝道者ビリー・グラハムは、女性と自分のたった二人で、エレベーターにさえ乗らなかったそうです。また、伝道大会のためにホテルに宿泊する時、スタッフの人たちが部屋をくまなく調べるのだそうです。女が隠されているかもしれないのです。まさか、そんなこと！と思いますが、サタンは、虎視眈々と罪を犯すのを待っていますから、予防線を張ったのです。

## 2D 迫害 11-18

<sup>11</sup> このようなある日のこと、彼が仕事をしようとして家に入ると、家の中には、家の者が一人もいなかった。<sup>12</sup> 彼女はヨセフの上着をつかんで、「一緒に寝ましょう」と言った。しかしヨセフはその上着を彼女の手に残し、彼女から逃れて外へ出た。

あからさまな霊の攻撃に対して、ヨセフは最も正しいことをしました。「逃げる」ことです。これは敗北者のように見えますが、いいえ、誘惑に対して、その場から離れるという大胆な一歩が必要なのです。「Ⅱテモ 2:22 あなたは若いときの情欲を避け、きよい心で主を呼び求める人たちとともに、義と信仰と愛と平和を追い求めなさい。」ここの「情欲を避ける」は、「逃げる」とも訳すことができます。そのまま、そこから逃げていくのです。

<sup>13</sup> 彼が上着を彼女の手に残して外へ逃げたのを見ると、<sup>14</sup> 彼女は家の者たちを呼んで、こう言った。「見なさい。私たちに対していたずらをさせるために、主人はヘブル人を私たちのところに連れ込んだのです。あの男が私と寝ようとして入って来たので、私は大声をあげました。<sup>15</sup> 私が声をあげて叫んだのを聞いて、あの男は私のそばに上着を残して、外へ逃げて行きました。」

彼女は邪悪です。肉欲の次は、中傷です。なんと、逃げた時に脱いだ上着を、真逆の物証に使っています。

<sup>16</sup> 彼女は、ヨセフの主人が家に帰って来るまで、その上着を自分のそばに置いておいた。<sup>17</sup> 彼女は主人に、このように告げた。「あなたが私たちのところに連れて来た、あのヘブル人の奴隷は、私にいたずらをしようとして私のところに入って来ました。<sup>18</sup> 私が声をあげて叫んだので、あの男は私のそばに上着を残して、外へ逃げました。」

「あのヘブル人の奴隷」という言葉に、一種の侮蔑がありますね。

## 2B 監獄の管理 19-23

<sup>19</sup> 彼の主人は、「あなたの奴隷がこのようなことを私にしました」と告げた妻のことばを聞いて、怒りに燃えた。<sup>20</sup> ヨセフの主人は彼を捕らえ、王の囚人が監禁されている監獄に彼を入れた。こうして彼は監獄に置かれた。

「怒りに燃えた」というのは、だれに対して怒っているのかが、はっきりしません。ここの怒りは、不正が行われたことそのものに対する怒りでしょう。これほど自分の家が祝福されているのに、そこにこんなことが起こったことに対する怒りではないか？とも思います。彼は、侍従長あるいは親衛隊長です。彼をすぐにでも、死刑にすることは容易くできます。しかし、それをせず、監獄に入れたということは、完全にヨセフが黒だと思っていないからではないか？と思われる。

そして、ここは「王の囚人が監禁されている監獄」であります。これは、もう少し読むと、彼の家の中にあります。ファラオの家で起こったことについて、ポティファルは親衛隊長として監獄を、自分の家の中に持っていたのです。

ここが、正しく生きようとすることに対する対価です。霊の戦いにおいて、義のゆえに迫害するのだということです。主の山上の説教の、八つの幸いの最後が、義のために迫害を受けるのは幸いであるというのは、神の国の到来、主が来られたということは、世を支配する者の中に無理にでも、押し入っているということを意味するからです。だから、正しいことをすれば、みな喜び、受け入れるだろうと思うかもしれませんが、かえって迫害を受けるのです。

しかし、聖書には、正しい者は災いから免れるという約束も数多くあります。では、なぜ、正しいことをしたのに、悪いことが起こるのか？と思います。しかし、午前礼拝でも学びました、確かに主は必ず報いてくださるのです。しかし、それは全く苦しまないということではありません。むしろ、そういった悪い状況にあっても、そこから救われるということで報われるのです。ヨセフが、まさに監獄にまで追い込まれました。しかし、主は決してお見捨てになっているのではなく、そこから救い出されるご計画を、勝利するご計画を持っておられるのです。

<sup>21</sup> しかし、主はヨセフとともにおられ、彼に恵みを施し、監獄の長の心にかなうようにされた。

なんと、主は、監獄においても、ポティファルの家の時と全く変わりなく、共におられたのです。そして、全く同じ計らいをしておられます。まず、監獄の長がヨセフが気に入られるようにされました。

<sup>22</sup> 監獄の長は、その監獄にいるすべての囚人をヨセフの手に委ねた。ヨセフは、そこで行われるす



べてのことを管理するようになった。

なんと、監獄においても、監獄の長が彼を自由にして、他の囚人を任せるようにしたのです。彼に管理まで任せています。「詩 105:18 ヨセフの足は苦しみのかせをはめられその首は鉄のかせに入れられた。」とあります。初めは、足と首にかせがかけられていました。しかし、どこかの時点で外されて、彼はいくらでも逃げようと思えば逃げられたでしょう、鍵なども任されていますから。しかし、ヨセフは任されたことを忠実にこなし、管理しているのです。

<sup>23</sup> 監獄の長は、ヨセフの手に委ねたことには何も干渉しなかった。それは、主が彼とともにおられ、彼が何をしても、主がそれを成功させてくださったからである。

ポティファルの家と全く同じことです。完全に任せて、干渉せず、自由にさせています。こうして、主がおられて、何でも成功させてくださいました。これが、キリスト者にとっても、キリストにあって自由にされている姿です。神の子どもの姿です。

このように制約が課せられても、召しは変わらないのですから、神が働かれます。イランでは、地下教会で働いている人々が、牢屋に入れられることが多いです。けれども、その監獄が伝道場になります。また礼拝の場になります。召しが変わらないからです。私も、召しと賜物の中に聖書を教えることだと思われました。海外の宣教地に行って、結局、行ったことは、聖書を教えることでした。私たちの家に、青年たちが定期的に来て、聖書を学んでいきました。それから、若者たちへの聖書の学び会もしていました。

## **2A 監獄の忘却 40**

### **1B 同じ監獄 1-4**

<sup>1</sup> これらのことの後、エジプト王の献酌官と料理官が、その主君、エジプト王に対して過ちを犯した。

ファラオの食事に、毒が盛られていたのでしょう。献酌官は、ぶどう酒を王に出す、王の最側近です。ペルシアの王アルタクセルクセスに対して、ネヘミヤが献酌官だったことを思い出してください。王を殺すも生かすもできる人ですから、最も信頼のおける人でなければいけません。同じように、食事にも毒を盛ることができるので、料理官も非常に重責です。ところが、前もって試食をした人が食べて、倒れてしまったのでしょう。それで二人に嫌疑がかけられました。

<sup>2</sup> ファラオは、この献酌官長と料理官長の二人の廷臣に対して怒り、<sup>3</sup> 彼らを侍従長の家に拘留した。それは、ヨセフが監禁されているのと同じ監獄であった。<sup>4</sup> 侍従長がヨセフを彼らの付き人にしたので、ヨセフは彼らの世話をした。彼らは、しばらく拘留されていた。

先に話しましたが、王の監獄は、ポティファルの家にありました。彼が親衛隊長だからです。そしてヨセフが世話をしていますが、主語に注目してください。「侍従長」すなわち、ポティファルです。監獄の長が、ヨセフに完全に信頼しているのをポティファルは知ったのでしょう。自分の家で起こったことを、また自分が行ったことを思い出したに違いありません。そして、ここからポティファルが、ヨセフが罪を犯したとは確信していないことも、伺わせます。

これらがすべて、主の導きであることが分かります。もし、ヨセフがこの監獄に入れられていなかったら、ファラオの献酌官に会うことはなかったからです。彼が、ファラオにヨセフのことを伝えます。

## 2B 夢の解き明かし 5-19

### 1C 神のなさること 5-8

<sup>5</sup> さて、監獄に監禁されていた、エジプト王の献酌官と料理官は、二人とも同じ夜にそれぞれ夢を見た。その夢にはそれぞれ意味があった。

ヨセフの生涯は、神の下さる夢によって導かれています。彼自身が見た夢がありました。次に、ここ献酌官と料理官の見た夢を解き明かしています。さらに、二年後にファラオの見た夢を解き明かし、それによってエジプトが食糧危機に対する緊急策も助言します。それで、ファラオの次に権力のある人間となるのです。

同じような人が、ダニエルです。ダニエル書は、夢における幻、預言に満ちています。ネブカドネツアルの見た夢があります。人の像の夢と、木が切り倒されて、株に鎖でつながれている王の夢を解き明かしました。夢ではないですが、ベルシャツアルには、壁に人の指で文字を書いていた。それを解き明かします。そして自分自身の見た夢があり、四頭の獣、雄山羊と雄羊の衝突、それから、御使いたちの戦いと、終わりの日における大いなる戦いです。彼も、夢と、その行政能力を異教の王に認められ、側近として働いていました。

<sup>6</sup> 朝、ヨセフが彼らのところに来て、見ると、彼らは顔色がすぐれなかった。

そりゃあそうですね、意味あり気な夢を見ていますが、いったいどんなことなのか分からないからです。次の章にはファラオもそうですし、ダニエル書においても、ネブカドネツアルがそうでした。

<sup>7</sup> それで彼は、自分の主人の家に一緒に拘留されている、このファラオの廷臣たちに「なぜ、今日、お二人は顔色がさえないのですか」と尋ねた。

顔色の変化にヨセフは気づいています。彼がしっかりと、献酌官と料理長の世話をしていることが分かります。



<sup>8</sup> 二人は答えた。「私たちは夢を見たが、それを解き明かす人がいない。」ヨセフは言った。「解き明かしは、神のなさることではありませんか。さあ、私に話してください。」

神のなさることではありませんか、と、はっきりと言っていますね。彼の純粋な信仰がここで見えています。ポティファルの妻に対しても、神に罪を犯すことはできないと、はっきりと神の名を呼んでいますし、そのまま言っています。彼の無垢な性格のために、夢をそのまま兄たちや父に話しましたが、ここでは純粋な信仰によって、そのまま神のなさることだと言っています。

そしてこのことが、彼を高慢の罪から守っています。事実、神のなさることなのです。ところが周りの人々は、ヨセフにその力があるのではないかとみなします。それを受け入れ、自分を偽ってはいけません。だから、事実そのとおり、主によって与えられるものだと、自分自身に対しても、人々に対しても言い聞かせる必要があります。

#### 2C 献酌官 9-15

<sup>9</sup> 献酌官長はヨセフに自分の夢を話した。「夢の中で、私の前に一本のぶどうの木があった。<sup>10</sup> そのぶどうの木には三本のつるがあった。それは、芽を出すと、すぐ花が咲き、房が熟してぶどうの実になった。<sup>11</sup> 私の手にはファラオの杯があったので、私はそのぶどうを摘んで、ファラオの杯の中に搾って入れ、その杯をファラオの手に献げた。」

これが夢の内容です。

<sup>12</sup> ヨセフは彼に言った。「その解き明かしはこうです。三本のつるとは三日のことです。<sup>13</sup> 三日のうちに、ファラオはあなたを呼び出し、あなたを元の地位に戻すでしょう。あなたは、ファラオの献酌官であったときの、以前の定めにしたがって、ファラオの杯をその手に献げるでしょう。

聖書では「三日」が良く出てきます。事実だと確認するというような意味で一貫しています。イエスは、三日目によみがえられましたが、確かに死んでいたのに生き返ったということです。

そして、解き明かしですが、夢だけでは、ここまでの解釈ができません。人間の知恵ではなく、神からの賜物によって解き明かしができます。コリント第一 12 章には、異言の賜物の他に解き明かしの賜物があります。それは必ずしも翻訳ではなく、意味するところを解釈する賜物です。

<sup>14</sup> あなたが幸せになったときには、どうか私を思い出してください。私のことをファラオに話して、この家から私が出られるように、私に恵みを施してください。<sup>15</sup> 実は私は、ヘブル人の国から、さらわれて来たのです。ここでも私は、投獄されるようなことは何もしていません。」

ヨセフは、この機会を捕らえて、自分が出獄できるように献酌官に懇願します。それができるのは、最高権力者であるファラオです。日本では、北朝鮮に拉致されたご家族が、何度となく首相に会い、また米国の大統領にさえ会っています。何とかするのは、権力者しかいないからです。

事情を話していますが、ヨセフにとって、兄によって売られたのは、「**ヘブル人の国から、さらわれて来た**」ということです。まず、ヘブル人がカナンの地に寄留しているだけですが、彼は信仰の中で、そこがヘブル人の国なのだとみなしています。そして、兄たちが売ったのですが、さらわれてきた、すなわち誘拐や拉致と同じようにみなしています。こう訴えることで、脱獄だけでなく、エジプトから出て行く自由も与えられます。

そしてここに投獄されている理由はないと言っています。けれども最後に一言だけで、目的は故郷に戻ることでした。しかし、彼は後にファラオの夢を解き明かすことで、故郷に戻る事が神のご計画ではなく、むしろ、ヤコブの家をエジプトに呼び寄せることで、飢饉から救うことが目的であることを知ります。

### 3C 料理官 16－19

ヨセフにとっては、悲劇が始まります。このことを押したかったのに、料理官が話をさえぎりました。

<sup>16</sup> 料理官長は、解き明かしが良かったのを見て、ヨセフに言った。「私の夢の中では、頭の上に枝編みのかごが三つあった。<sup>17</sup> 一番上のかごには、ファラオのために、ある料理官が作ったあらゆる食べ物が入っていたが、鳥が私の頭の上のかごの中から、それを食べてしまった。」

当時のエジプトの絵に、頭にかごを置いている人の絵が見つかっています。

<sup>18</sup> ヨセフは答えた。「その解き明かしはこうです。三つのかごとは三日のことです。<sup>19</sup> 三日のうちに、ファラオはあなたを呼び出し、あなたを木につるし、鳥があなたの肉をついばむでしょう。」

ヨセフは、この料理官の見た夢にも誠実に解き明かしをしました。三つのかごは、三つのつると同じ三日のことです。そして料理を鳥がついばみますが、彼が、毒を盛ったという判決が下ります。

### 3B 献酌官の復帰 20－23

<sup>20</sup> 三日目はファラオの誕生日であった。それで彼は、すべての家臣たちのために祝宴を催し、献酌官長と料理官長を家臣たちの中に呼び戻した。<sup>21</sup> そうして献酌官長をその献酌の役に戻したので、彼はその杯をファラオの手に献げた。<sup>22</sup> しかし、料理官長のほうは木につるした。ヨセフが彼らに解き明かしたとおりであった。

三日目というのは、ファラオの誕生日のことでした。そこで祝宴ですべての家臣が呼び戻されます。しかし、料理官長が罪を犯したことが明らかにされて、彼は木につるされます。

<sup>23</sup>ところが、献酌官長はヨセフのことを思い出さないで、忘れてしまった。

ここです、なんと献酌官長は、ヨセフのことを忘れてしまったのです。ヨセフにとっては、くやしくてもしかたがなかったでしょう。もう少し、献酌官長に強く訴えることができたならば、という思いがよぎったのではないかと思います。一日、二日、一週間、二週間、一カ月、二カ月、ずっと待っていても、一向に牢から出される気配がありません。

しかし、次の章を見れば、この忘れたということも、神がお用いになっていることが分かります。二年後に、世界的な豊作に引き続き、大飢饉が来るという、世界情勢を大きく変える出来事が起こるのです。その時に、初めて献酌官がヨセフのことを思い出すのです。

神は、すべてのことを相働かせて、益とされる方なのです。しかし、条件があります。「ロマ 8:28 神を愛する人たち、すなわち、神のご計画にしたがって召された人たちのためには、すべてのことがともに働いて益となることを、私たちは知っています。」神を愛する人たちにとって、です。そして神のご計画にしたがって召された人々です。言い換えると、召されているので、神を愛しています。神に愛されて、そして愛をもって応答している人々です。

ヨセフが、その二年間も神を忘れることはありませんでした。共に神と歩んでいました。だからこそ、ファラオが夢を見た時に、その解き明かしに対して、神の御霊をもって解き明かすことができたのです。もしヨセフが、自暴自棄になり、信仰から離れていたらどうでしょうか？ファラオの前に出て、何も言えなかったのです。これが、主に誠実に仕え、へりくだり、そしてちょうど良い時に、主が引き上げてくださるという者の姿です。ヨセフが、ヤコブの家を救うという大きなご計画があって、そこために召されており、それで神を愛していました。そして、献酌官長の、すっかり忘れたという過ちをも用いて、相働かせて益としておられたのです。

私たちは、そのご計画の途中経過しか知りません。神が最善のことをしている時、最悪なことが起こっているかもしれません。しかし、その先があるのです。大事なものは、へりくだって、主と共に歩むことです。「ミカ 6:8 主はあなたに告げられた。人よ、何が良いことなのか、【主】があなたに何を求めておられるのかを。それは、ただ公正を行い、誠実を愛し、へりくだって、あなたの神とともに歩むことではないか。」